

伝統が培った京都スタイルを発信

池坊 由紀 華道家元池坊次期家元

<産業とからめて考察>

めまぐるしい時代だからこそ、30年先というスパンで京都のあるべき姿を考えるという「京都の未来を考える懇話会」は意味があったと思います。目先のことだけに対処するのではなく、京都だから持てる包容力、ゆったりとした時間感覚で大きなグランドビジョンを描かなければなりません。

文化は長い歴史をかけて、先人の知恵や社会とのかかわりの中で育まれてきました。この懇話会で最も勉強になったのは、文化そのものを語るのではなく、文化が生きていくためには、どうすれば良いのか、観光や産業とどのようにリンクしながら共に発展していくべきかといった視点で考えられたことです。

文化に生きる者は、ともすれば文化の本質論に終始してしまいがちですが、そうではなく責任を持って実践していく行政の立場や、また他の重要な立場の視点からも議論された点が特徴です。当懇話会では一つのテーマに対し、各々の立場に基づく複合的な視点から多角的に議論され、それがひとつの集約形として提言に至りました。これは京都だからこそできた、ひとつの大きな成果といえるのではないのでしょうか。

<自然といかに関わるか>

文化は数字で評価できない部分が多いと思うのですが、そのため危機感がダイレクトに伝わらない。しかも文化は実際いろいろな分野がリンクしていて影響力が大きいにもかかわらず、気がつけば伝統工芸や文化に直接携わる方が徐々に少なくなってきたのに気づき、あわててしまう。

3年間にわたる懇話会で京都の文化に対する危機感が共有できました。またその状況を打破するために、どうすべきかも検討しました。今回まとめたビジョンを多くの方々にご理解いただければ、未来が拓けるような気がします。

いけばなは、かつて花嫁修業の一つとして受けとめられる向きがありました。それはそれで大切ですが、東日本大震災

を経験して、若い人たちには、いけばなを通して自然との共生や、その中から育まれることの豊かさといった精神性を学ぼうという気運が顕著になってきているように思えます。

戦後、日本人はモノの豊かさ引き換えに大切なものを忘れてきてしまったのではないのでしょうか。明日には枯れてしまうかもしれない花ですが、そこに癒しを求める人もいます。より強い生を意識する方もいるでしょう。

京都で連綿と続いてきた伝統文化は、さりげない日々の営みの中にこそあるのではないのでしょうか。いけばなやお茶だけでなく、「門ばき」や「おもてなし」、「儉約」といった日常生活の姿も京都の大切な文化です。

懇話会の中で最もユニークな提案が、皇族の方に京都に住んでいただく「双京構想」だと思います。京都の文化、それは日本文化の源でもあるのですが、その核として皇室がありました。職人たちは腕を磨き、雅を競ってより芸術性の高い品々を世に出していったのです。

そうした京都の内側からの力が少しずつ弱くなってきているように思えます。東京一極集中が進み、ジャッジする市場も東京に偏ってしまっている。みんなが東京のコピーであろうとする時、京都はコピーでない価値観や文化を発信しなければなりません。双京構想は現代人に対する警鐘にもつながると考えます。

<女性の力をもっと必要>

超高齢社会を迎え、労働人口が大きく減少していくのは確実です。持続可能な社会を築くためには今後、女性の力をもっと必要です。確かに女性の社会参画は進みましたが、結婚—出産—子育て後の復職率は低く、個人の努力だけでは追いつかない状況です。社会システムがまだまだ不十分で、柔軟性のある働き方ができません。家事、育児や介護は女性まかせという考え方も払拭できていません。男女がともに支えあっていくという意識改革、仕組みが大切です。

いけばな 由紀

京都市出身。公益財団法人日本いけばな芸術協会副会長。いのちを生かすという、池坊いけばなの精神に基づいた多彩な活動を展開。趣味は音楽及び舞台鑑賞。



昔は家族も地域も相互扶助が当たり前でした。今は人間関係の風通しが悪く煮詰まっているような印象を受けます。心を開く場がない。お年寄りや子どもへの虐待などを耳にすると、「お願い、助けて」と言える状況がなく、追い詰められているように感じます。

京都は古いまちですから、長年培ってきた知恵をいかしながら、現状にあった新しい緩やかな連帯、絆を育むことができそうです。目に見えるまちづくりだけでなく、「人と人」や「人とまち」といったキーワードの京都モデルも考えられるのではないのでしょうか。

未来のため「いま」の努力を

白石 方一 京都新聞社会長兼社長

＜求められる生き方の変化＞

現代はめまぐるしく変化する時代です。しかも政治、経済、文化が地球規模で密接に絡まり合い、遠い国で起こった変化が世界に波紋を広げることもしばしばあります。このため未来は一層不透明となり、不安に満ちています。

30年先の京都は、どのような地域になっているのでしょうか。国立社会保障・人口問題研究所が今春発表した「2040年の地域別将来推計人口」によると、日本の人口は2010年に比べ約2,000万人減少し、65歳以上の人口の割合（高齢化率）は全都道府県で3割を超えています。京都も人口減少率は15%を超え、高齢化率が36%に達すると推計されています。少子化による人口減と急速な高齢化は、着実に迫ってきています。このまま少子高齢化が進めば、社会のあり方や個人の生き方に大きな変化が求められるでしょう。

こうした変化を前提に、京都の行政、産業、大学、文化、観光を担うリーダーが、それぞれの見識をもとに30年先の京都の「ありたい姿」を語り合い、共通認識を深める「京都の未来を考える懇話会」を開催してきました。

3年間にわたる議論の結果、私たちは京都の未来像を「世界交流首都・京都」として描きました。そして、京都の特性、歴史的背景、自然環境、潜在的なパワーなどを検証して、描いた未来像を実現するために「世界の文化首都」「大学のまち」「価値創造都市」の三つの目標を掲げました。

＜ともに歩む運命共同体＞

未来像とはいえ、マスコミが行政や経済界と一緒にあって公共政策などを議論するのは、報道の公正、中立性を損なうおそれがあると懸念する向きがあるかもしれません。しかし、あえて懇話会に参加したのは、京都新聞という地方紙が、この地域と共に歩み、運命共同体としての存在意義を持つと確信するからです。

新聞は事実を伝え、その背景を解説し、論評する役割を持

っています。現代史の語り部と自負しておりますが、さらに一步踏み込み、未来への指針を提供することに挑戦したいと考えました。また懇話会が、行政、経済界、文化芸術の世界といった立場の異なるリーダーたちの率直に話し合える場となり、30年先の大きな目標に向けて心をつなぐという気運を醸成できたことも成果でした。

懇話会設立から1年後に起こった東日本大震災、福島第1原発事故は、戦後社会にさまざまな問題点を投げかけました。

私も被災地に立ち、津波にのみ込まれて荒涼とした光景を目の当たりにしました。犠牲になった方々に哀悼を捧げるとともに私たちの築いてきた社会は正しかったのか、考えを新たにしました。

未曾有の災害に多くの人々が物質的な豊かさに偏った社会のあり方を見直すべきだと考えるようになり、人と人との絆やコミュニティの大切さに目を向けるようになったと指摘されています。全国から駆けつけた人々が被災者に寄り添いながらボランティア活動を展開し、さまざまな分野のアーティストたちが被災地で励ましのイベントを開催しました。ごく普通の市民も、それぞれの身近な暮らしの中で出来る支援を繰り返しました。被災者だけでなく支援者の多くが、支え合いや絆の大切さを、身をもって感じ、価値観を新たにしたのはのではないのでしょうか。

大震災は、私たちが災害列島に住んでいることを再認識させ、防災・減災対策や原発に依存したエネルギー政策の見直しを迫り、東京一極集中の脆弱さなどの問題点を突きつけました。これらの課題は、今すぐに解決できるものではなく、長期的な視点でものごとを考えていかなければなりません。

たとえば、脱原発を宣言したとしても、事故を起こした福島第1原発を安全な状態にするには、まだまだ時間がかかります。使用済み核燃料をどのように安全に保管するか、気の遠くなるような歳月が必要です。東京一極集中を解消するのも同様です。



しらいし みちかず

1959年12月生まれ、京都市出身。
モットーは、「まず、当たり前のことを当たり前にする」。
座右の銘は、「継続は力なり」。
趣味は、音楽鑑賞、読書、ウォーキング。



＜府民・市民、議論のきっかけに＞

懇話会は長期的な視点に立って、京都の未来像を考えました。「30年先の京都」というと、遠い未来とを感じる人もあるかもしれません。人はどうしても目先の事柄にとらわれがちです。やっかいな問題は棚上げし、先送りしたいと考えるのも無理からぬ側面があります。

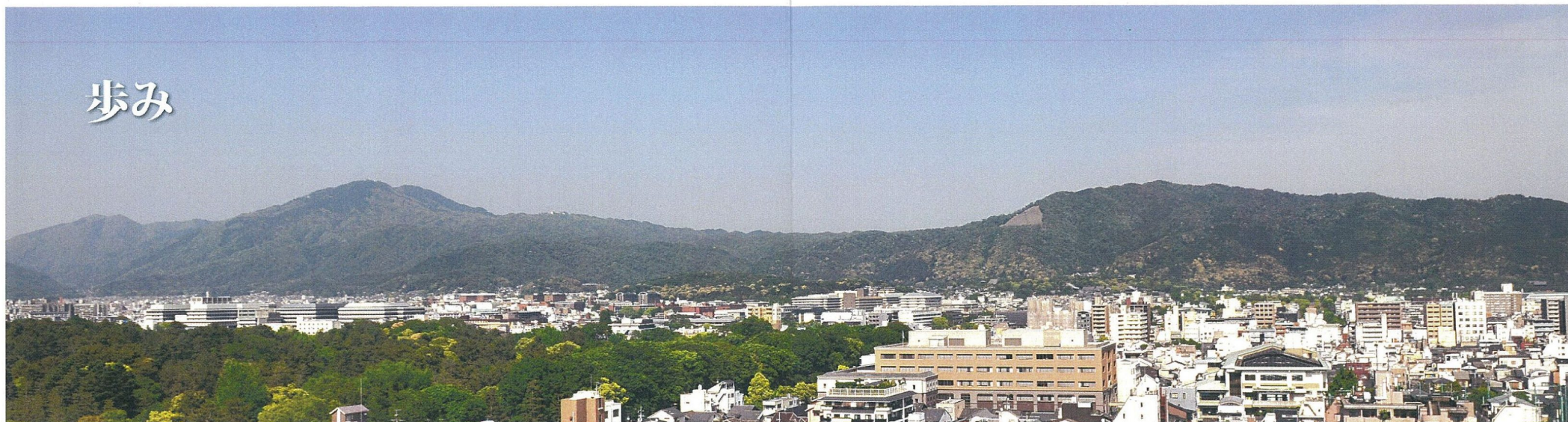
しかし掲げた目標・夢・未来像を実現するには、不断の努力が必要です。「30年先」は、「いま」の連続で成り立つからです。京都には世界に誇る歴史・文化遺産があり、現代に息づいていますが、伝統を受け継ぐとともにたゆまぬ革新が繰り返され、生き残ったのではないのでしょうか。

今回提案しました「世界交流首都」という目標は、絶対的な考え方ではありません。批判も大いに歓迎です。京都府民、市民の議論のきっかけとなり、一層素晴らしい未来の扉を開くことにつながれば幸いです。

地域に根ざし、地域とともに歩む言論・報道機関の使命と考えるからです。



歩み



●これまで

2010年4月、京都の未来を考える懇話会の第1回会合で、私たちは少子高齢化問題から議論をスタートしました。30年後の未来は不透明で、ビジョンの前提条件も明確ではありません。しかし、懇話会メンバーの誰もが地球温暖化や高齢化など、これまで世界が経験したことのない大きな環境変化に漠然とした不安を抱いていました。なかでも急速な少子高齢化は日本にとって喫緊の課題であると考えたからです。

着実に進行する少子高齢化で、30年後の高齢者の割合は3割を超え、生産年齢人口は大きく減少します。現在、世界第3位のGDPも後退し、働き方や家族のあり方、地域コミュニティ、福祉のあり方に再考が迫られることになります。そうした状況の中で、京都が輝き続けるためには、どうすればよいか。3年間にわたる懇話会のメインテーマでした。

私たちはまず、京都の過去と現状、特質を分析することから始めました。「千年の都」の京都には国内外から多くの人が集まり、その交流を通じて産業や文化が生み出されてきました。また多数の大学が集積し、人口当たりの学生数は全国1位で、多くの観光客も訪れています。

人口減社会を迎えるに当たって、学生や留学生、観光客に代表される交流人口をいかに増やすかが、京都の活性化に不可欠の条件であることをあらためて確認しました。

懇話会設立から1年を迎えようとした2011年3月、東日本大震災と東京電力福島第1原子力発電所事故が起こりました。震災と原発事故は、戦後宮々と築いてきた繁栄を根底から覆す衝撃を私たちに与えました。東京一極集中の脆弱さや、地方の切り捨てで築かれた高度成長の弊害を見せつけました。

同時に、長期的な視点でものごとを考えていく大切さも学びました。自然災害と対峙するには30～50年のスパンで対策を講じなければなりません。エネルギーや少子高齢化問題、地球温暖化対策なども同じです。私たちは、30年後という長期的視点で京都の未来像を考えることの重要性を再認識しました。

●これから

今回提案しました「世界交流首都・京都」は、3年間にわたる議論の末に出した30年後の京都の「ありたい姿」です。このビジョンは、法令で定められた行政の総合計画や企業の長期計画のように拘束性はありません。むしろ京都の未来への素描(デッサン)だと考えています。府民、市民が絵の具を選び、肉づけして初めて完成できる未来像です。

また現代は、かつてない変化の著しい時代です。絶えず変化に注目しながら前提を問い直し続け、修正し、新たな知見を見出していかなければなりません。固定化されたものではなく、柔軟性に富んだビジョンを描きたいと考えます。

京都の未来を考える懇話会は、今回の提言で一区切りをつけますが、今後、府民、市民とビジョンを共有し、従来の行政の枠組みにとらわれずオール京都で新しいまちづくりのあり方を検討していきたいと考えております。懇話会を構成する団体は、「京都ビジョン2040」を踏まえ、実現に向けて具体的な行動を推進します。京都の各界がビジョンの理念や考え方を共有し、発展させることで京都の輝きは一層増すでしょう。

懇話会は今後も定期的に会合を持ち、提言の進捗状況を把握するとともに、実務者レベルで相互に情報を共有し連携を強化していくつもりです。府民、市民一人ひとりが未来に積極的にかかわることでビジョンを実現できると確信します。



3年間の議論のテーマ

準備会	2010年	1月	京都の現状認識とビジョン共有の必要性を確認
第1回		4月	懇話会の発足と人口問題について
第2回		7月	30年後の京都の「ありたい姿」について
第3回		9月	「大学都市・京都」について
第4回		12月	「文化都市・京都」について
第5回	2011年	3月	「中間まとめ」の策定と情報発信強化を決定
第6回		6月	東日本大震災を踏まえ、30年後の京都について
第7回		8月	「中間まとめ（案）」について
第8回		11月	「中間まとめ（案）」について
第9回	2012年	2月	「第1次提案（案）」を決定
		3月	「第1次提案」記者発表
第10回		6月	「30年後の京都の産業」について
第11回		10月	「30年後の京都観光」について
第12回		11月	「30年後のエネルギー・環境」について
第13回	2013年	5月	「京都ビジョン2040」を決定、記者発表

京都の未来を考える懇話会スタッフ

京都府 本田一泰 畑村博行 野本英伸 今里里美 松下妙子 牧野潤子
 京都市 山内秀顯 山内 清 柴山 薫 辻 智之 金谷勝巳 塚本昌子
 京都商工会議所 山下徹朗 日野直樹 堀口亜希子 東浦由高 梅影真生
 京都大学 小寺秀俊 高見 茂 松井一純 駒村正章 白石賢一 野口貴史
 オムロン株式会社 北川 尚 広岡義雄
 株式会社ヒューマンリソース研究所 田口智博 中野善浩
 株式会社京都銀行 秋野 稔 楳館孝寿 安井幹也 猪熊清統
 株式会社京都総合経済研究所 森 秀人
 華道家元池坊総務所 河尻智子 白石雄介
 株式会社京都新聞社 直野信之 吉澤健吉 焼石文雄



Kyoto Vision 2040